竹内修一

キリスト教とは何か（1）「イエス」とは一体誰なのか

～要旨～

今回は、キリスト教とは何かについて考えるときの、ヒントになるようなことをいくつかお話ししたい。まず考えてみたいのは、「キリスト教とは何か」だ。これは言い換えれば「イエスとは誰なのか」という問いでもある。

わずか三十余歳の生涯であったイエスは、どんな人物だったのか。まず彼の「イエス」という名前それ自体は、当時それほど珍しいものではない。その背後にあるのは、「神は救う」といった意味だ。そして「キリスト」は、ファミリーネームではなく、「油を注がれた者」を指す。当時は何らかの職に就いた際、王も含めて油を塗られたので、その慣習を指している。

イエスとキリストを中黒で結んだ「イエス・キリスト」という表記は、イエスが救い主であることを示す。つまり「イエス・キリスト」という言葉は、イエスが救い主であることを認める点で、最も短い信仰告白であるとも言える。

イエスはユダヤ人として生まれ、その慣習の中で生きてきた。したがってキリスト教の誕生について考えるには、ユダヤ教についても言及しなければならない。そのユダヤ教において、神とはどんな存在だったか。

例えばユダヤ教の聖典である旧約聖書には、イスラエルの神は唯一の生きている神だとされる（この点は新約聖書にも受け継がれている）。聖書とは、旧約にしろ新約にしろ、「いのちとは何か」について書かれた書物だということができる。

聖書が言う「生きている神」は、人間と契約を結ぶとされる。神との関わりにおいて、神の方から契約違反がなされることはない。聖書という字が示す通り、ここに書かれているのは人間と神との約束（契約）であり、その実現を導く存在として、イエスは神から遣わされた。聖書に書かれたイエスの位置付けは、ひとまずそういうものとして理解することができるだろう。

ちなみに、宗教は大元をたどれば「根」は同じだとも言われるが、そうは言ってもやはり譲れない部分もあると考える。マザー・テレサも、死にかけている人がいれば、その

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

信仰に基づいて荼毘に付したが、彼女自身はカトリックであることを捨てなかった。デリケートな問題であるから、仮に同じ「根」を持つとしても、ではなぜ分かれたのかを丁寧に見ておく必要があるだろう。

～講義録～

●「イエス・キリスト」という名の意味

初めまして。上智大学の竹内です。これから少しばかり、キリスト教について話をしたいと思います。2000 年に及ぶ歴史があるキリスト教について、短時間で簡潔に話すのは難しいと思いますが、「キリスト教とは何か」ということを皆さんが問うたときに、考えるヒントになるようないくつかのことをお届けできればいいかと思います。

まず考えてみたいのは、「キリスト教とは何か」という問いです。この問いかけを言い換えると、次のような問いにもなるかと思います。それは「イエスとは誰なのか」ということです。イエス・キリストという名称自体はお聞きになったことがあるかと思いますが、彼は確かに歴史的な人物でした。今から約 2000 年前、大体紀元前 6 年から 4 年くらいに生まれ、そして紀元後 30 年頃に亡くなったと言われています。たかだか三十数歳という短い生涯だったのですが、この歴史的な人物であるイエスが人々の中に入っていくとは、どういうことなのか。

最初に、この「イエス・キリスト」という名称について確認しましょう。この「イエス」という名前は、ある意味ではとても平凡な名前だったようです。しかし、名前一つ一つには意味があります。「神は救い」や「神は救う」という意味が、この言葉の背後にはあるそうです。他方で、キリストとは何なのか。これは名前ではなく、ましてや家族名（ファミリーネーム）でもありません。もともとの意味は「油を注がれた者」という意味だと聞いています。

「油を注がれる」とはどういうことか。当時の人々は、いろいろな役職に就く際、王様を含めて油を塗られました。その「油を注がれた者」というのが「キリスト」で（これはやがて「救い主」という意味になりますが）、ギリシャ語では「クリストス」と言いました。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

よく「イエス・（中黒）キリスト」という表記を見るかと思います。私はこの中黒にとても意味があると思います。どういうことかと言うと、この中黒は「イエスはキリストである」の「である」に当たるところなのです。「イエス」という固有名詞と、「キリスト」という深い意味を持った言葉を結び付けるのが中黒になります。「イエスはこの救い主である」、言わばこれは、一番短い信仰告白です。

彼はユダヤ人でしたから、「イエスはユダヤ人である」という表記もできるし、「イエスは男性である」でもOKです。しかしキリストというその言葉を帯びたときには、イエス以外に置くことはできなくなります。他は代わりがいないという意味での信仰告白として、イエス・キリストは「イエスはキリストである」ことと捉えていいのではないかと思います。

●旧約聖書と新約聖書に共通すること

イエス自身は一人のユダヤ人であり、ユダヤ教の中で育ちました。イエスが原点となってキリスト教が生まれてくるのですが、本来イエスは、他のユダヤ人と同じようにユダヤ教の慣習に従って生きていた一人の人物でした。このことは、押さえておきたいところです。ですから、キリスト教が誕生することにおいても、ユダヤ教を無視することはできないと思います。ユダヤ教の延長線上にキリスト教が位置づけられる。これは確かなことだと思います。

では、そのユダヤの人々が理解していた、そして心を向けていた神は、一体どういう方であったのか。旧約聖書の至るところに、「神は生きている」という表記がよく出てきます。神は常に生きている存在であるということ。それを受け継いだ新約聖書でも、例えばルカの福音書にはこのように書かれています。イスラエルの神が、唯一の生きている神です。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである」。

これは、新約聖書にも受け継がれています。例えば、皆さんもご存じのように、聖書は1冊の厚い本になっています。厳密に言うならば、1冊の本というよりも、たくさんの書物が一つにコンパイルド（編集）されたものとして考えた方がいいと思います。旧約聖書と新約聖書に分けることができますが、キリスト教ではもちろん旧約聖書も大事ですし、

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

新約聖書ではイエス・キリストがどういうことを語り、どのような行いをしたのかということが書かれています。後でまた触れますが、聖書とは取りあえずそういう書物であることを、押さえておきましょう。「聖書とはどういう本ですか」と聞かれた場合、私は大体このように答えます。「聖書とは、“いのちとは何か”について書き記されている書物である」。これは旧約から新約に至るまで共通して言える点だと思います。

●イエスは、神と人間の契約を実現する存在

　では、その生きている神は、どういうあり方で人間に関わってきたのか。独特な言い方ですが、「神は人間と契約を結ばれる」という言葉があります。契約、ある意味では約束と考えてもいいと思います。例えば旧約聖書の出エジプト記 34 章にはこういう言葉が記されています。

　「主はモーセに言われた。『これらの言葉を書き記しなさい。わたしは、これらの言葉に基づいてあなたと、またイスラエルと契約を結ぶ』」。

　神の方からこの契約をたがえることは決してない、これは神の約束である。これは確信されていた点です。

　そしてこの神は、同時にまた聖なる方です。聖書の「聖」という字は、聖なる方であることも語られていることを示します。旧約聖書のレビ記にはこのように書かれています。

　「あなたたちはわたしのものとなり、聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである。わたしはあなたたちをわたしのものとするため諸国の民から区別したのである」。

　もう一つ紹介したいと思います。これは新しい契約についてのもので、同じ旧約聖書のエレミヤ書という預言書の 31 章の言葉です。

　「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

こういった言葉が旧約聖書の中にはいくつもあります。その契約を実現する存在としてイエスが与えられた。こういう位置付けでいいだろうと思います。

●宗教の「根」は一つだと言えるか

ちなみに、よく「宗教は同根である」とも言われます。しかし同根であるかどうかは、捉え方にもよります。例えでよく使われるのが、富士山に登るときに、どちらのルートで入っても頂上は同じだというものです。しかし私は、キリスト教の中にも、（他の宗教と）ある程度の歩み寄りはできるけれども、あるところまで行くとやはり譲れないところがあるのではないか、という考えはあると思います。だからといって、けんかするつもりではないのですけどね。ただ基本的に、全てに対して開かれるという意識は、とても大事だと思いますね。

名前はご存じかと思いますが、もう亡くなられたマザー・テレサという方がいらっしゃいます。彼女は、インドの、現在ではコルカタという場所で働いていました。スラムに出ていって、死にかけている人を連れてきます。そしてまず「宗教がありますか」と聞いて、もしあるならば、その人の宗教に沿ったやり方で荼毘に付し、なければそれなりに、というものでした。そういう意味で、全ての人に対して彼女の信仰は開かれていたと言えます。

しかしだからといって、彼女がカトリック信者であることをやめることはありませんでした。そこは「我を張る」という意味ではないのですが、一種の確信でしょうか。「あなたは間違っている」とは決して言わないのですが、それでも自分の信じているものはあるという意味で、カトリック信者であることを彼女は大事にしたのではないかと思います。

なかなかデリケートな問題ですよね。だからそういう問題を考える時には、分かれたところまで戻らなければ駄目です。何が原因で分かれたのか。いったんそこまで立ち戻らないといけません。話は「根」からですから。そこまで行かないと、なかなか難しい話であるという気がします。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

竹内修一

キリスト教とは何か（2）「神の国」はどこにあるのか

～要旨～

神との契約を実現するために遣わされたイエスは、一体何を目指していたのか。まず聖書には、彼の生い立ちや成長についての記述はほとんどない。30 歳を迎えた辺りで、彼は 12 人の弟子を集めて布教を開始する。これを「公生活（public life）」と言う。公生活を始めたイエスの最初の言葉は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というものだった。

上記の言葉は、聖書に含まれる四つの福音書（良き知らせを人間にもたらす書物）のうちの一つ、マルコの福音書にある。ここに書かれた「時は満ちた」とはどういうことか。そもそもキリスト教では、一度死んだイエスが復活し、また昇天した後、「終末」の時にイエスが再臨するとされている。その時に、この世界は完成する。「時が満ちた」でいう「時」とは、世界が完成し、キリストが復活する時を含んでいる。

イエスの誕生によって、世界の「時」は決定的な充実を得た。それは、「クロノス」というギリシャ語の言葉で示される「時」のように、形式的に測られる量的な時間ではない。同じく「時」を示す「カイロス」のように、その長短に関わらず質的に充実した時間を指す。世界や人間にとって、イエスの誕生はカイロスの中のカイロスと言えるものだ。

イエスが再臨する終末の時に、神の計画は完成する。神の国（天の国とも呼ばれる）はギリシャ語で「バシレイア」と言い、神の思いが実現する時と場を示す。重要なのは、神の国（天の国）は、どこか遠いところにある理想郷ではないことだ。終末の時に、神の計画は成就し、バシレイアがこの場に成立する。

「終末の時」に、人間は最も幸せになれる。その真の幸せにあずかるために人間に求められていることは、「悔い改め」だ。これは、生き方をもう少し是正しようなどということではなく、自分の全存在を賭けて生の方向転換を図ることだ。悔い改めるとは、それだけの覚悟が必要なことでもある。

人間にとって、神の国は見える形で言及することもできないし、その場所を指し示すこともできない。神の国は、人々の間、言わば「ここ」にある。そして重要なことに、神の国の到来は人間の悔い改め（回心）に依存しない。悔い改めるか否かを問わず、神の国は

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

やがて到来する。ここは確認しておくべき点だ。

～講義録～

●多くが不明なキリストの前半生

次に少し項目を変えて、イエスが一体何を目指していたのかについてお話しします。

最初に述べたように、彼の「イエス」という名は、ユダヤ人の間では珍しいものではありませんでした。そしてその意味は「主は救い」です。正確には「アドナイ」という言葉が使われていますが、「神」という言葉で置き換えてもいいと思います。「神は救い」あるいは「神は救う方である」という表現でもいいと思います。もう一方の「キリスト」というのは、人名ではなく、「油を注がれた者」です。ヘブライ語で「メシア」です。ヘンデル作曲の有名な「メサイア」に連なる言葉で、それのギリシャ語です。

イエスの生涯は短く、およそ33年くらいだろうと思いますが、その彼が赤ちゃんとして生まれ、そして30歳くらいになるまでの間、彼の生活がどういうものであったかについて、私たちはほとんど知りません。聖書の中にもそういう記述はありません。彼が生まれたクリスマスの物語はありますが、唯一の例外として12歳の時に神殿に詣でたという話があります。しかしそのくらいであって、30年間の素朴な生活についての資料はないのです。

そして30歳になった辺りに、彼は弟子たちを集めます。有名な12人の弟子を集めて、活動を始めます。彼の始めた活動のことを「公生活」といいます。「パブリック・ライフ」です。それ以前、30歳になる前のことは、私的な生活ですから「プライベート・ライフ」と表現することもあります。彼がその公生活を始めた時のことについて、マルコの福音書1章の言葉には、こういう表現があります。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。

これが、イエスの公生活における最初の言葉であると、マルコは記しています。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

●キリストの到来は、充実した時の現われ

福音書について簡単に説明します。新約聖書を開くと、最初に四つの福音書が出てきます。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネです。その後「使徒言行録」があり、その後「ローマ人への手紙」をはじめとして、たくさんの手紙が書かれていきます。ほとんどがパウロという人が書いた手紙です。

新約聖書の中でも、特に最初の四つの福音書がとても大事だと言われています。なぜならその福音書には、イエスがどういう言葉を語ったかという語録、そして彼がどういう行いをしたかという記録が記されているからです。

福音書の「福」は幸福の「福」ですね。「音（いん）」は音と書きます。すなわち福音とは、「幸せのメッセージ」で「手紙」という意味です。英語だと good news、「良き知らせ」です。その中のマルコの１節をもう一度申し上げます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」、これがイエスの公生活における最初の言葉でした。

「時が満ちる」とは一体どういうことか。後でまた詳しく述べることがあるかと思いますが、「終末」というやや難しい言葉があります。「終わる」に「末」と書きますが、元は「エスカトン」という言葉です。イエスは公生活を始めて、やがて十字架につけられて亡くなります。もしそこでイエスが亡くなっただけならば、キリスト教は生まれませんでした。なぜなら、イエスが亡くなった後、不思議な出来事が起きたからです。どういう出来事が起きたか。「イエスは今も生きている」と、彼の弟子たちがそういうことを語り始めます。なぜかと言うと、「イエスが復活した」という事実があり、その復活したイエスに出会ってしまった弟子たちが現にいたからです。そこからキリスト教が始まります。

復活したイエスは、その後しばらくまた弟子たちとともに生活をしますが、また去っていきます。これを「天に昇る」と言い、「昇天」という字を当てます。その際、イエスは一つの約束をしました。「わたしはまた戻って来る」と。「またわたしは戻って来る」、これを「イエスの再臨」と言います。そしてその時に、「この世は完成する」と理解されています。これも「終末」として考えていいと思います。

「時が満ちる」とは、その時を含みます。イエスという一人の存在がこの世に与えられたことで、ある意味で決定的な時の充実があると考えていいと思います。単なる量的な時

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

間の流れとしての時ではなく、決定的な意味内容を持った時、充実した時です。

ギリシャ語で言うと、「カイロス」という言葉に当たります。ギリシャ語の「クロノス」という言葉は、いわゆる量的な時間を指します。例えば「1 分が 60 秒である」とか「1 時間が 60 分である」とか「1 日が 24 時間である」という場合の時です。誰が考えても、誰が計っても、これは客観的なものとして理解できる時間です。

しかし私たち人間が時の体験をする際には、もう一つの体験があります。例えば自分にとって大切な人、好きな人と一緒にいるとき、時の流れは短く感じると思います。ある授業に出ていても、つまらない授業は長く感じるけれど、面白い授業だと短く感じます。でも時計で計ってみると、どちらも同じ 90 分です。人間の意識の持ち方、時間とのコミットメントの仕方、時の体験の仕方が変わってきます。量ではなく、質的に充実した時間のことを、カイロスと言います。イエスの登場は、まさにカイロスの中のカイロスとして考えていい出来事だろうと思います。

●この世界の終焉で、神の計画は成就する

では改めて、「時が満ちる」とは何か。これは、終末における救いの時と考えていいと思います。では終末とはどういう時か。言葉は厳しく聞こえるかもしれませんが、それは「神による裁きの時」です。皆さんも、もしかしたら「最後の審判」という言葉を聞いたことがあるかと思いますが、あそこに重なってくる言葉です。

「裁きの時」と言われますが、その本質は、神の計画、神のみ旨、神の心が成就する救いの時です。それゆえに、希望の時でもあるという理解です。ですから終末の時は、恐れの時、恐怖の対象として捉えられるものではなく、むしろ希望の時として捉える捉え方に転換することになります。

「神の国」という表現も、それだけでは不思議なことに聞こえるかもしれません。「バシレイア」というギリシャ語が当てられています。「神が王として支配すること」という表現があり、その王のことを「バシレウス」と言います。神がそのバシレウスとして支配すること、言い換えれば「神の思いが実現する時と場」、これがバシレイアです。ですから「神の国」という言葉は、「神の支配」という他の表現に置き換えることができます。全てにおいて、神の考えていること、思い、心が満ち満ちた状態と考えていいでしょう。

「神の国」という言葉は、聖書の中でもよく使われます。例えばマタイ、マルコ、ルカ、

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

ヨハネの四つの福音書のうち、マタイの福音書では「天の国」という表現が使われます。意味内容は全く同じです。でも「天の国」という言葉を聞くと、多くの方々は死んだ後に行く先の国のように考えるかもしれません。しかしそうではなく、「神の国」であれ「天の国」であれ、今ここにおいて実現するものと理解していいです。神の国（天の国）は、死んだ後に行くところではない。これだけは、理解しておきたいと思います。

神の国は、今ここにおいて実現する。例えば、イエスはこう語ります。

「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」。

イエスにおいてこの「神の国」は、端的な事実となったということです。そしてこれが福音に他ならないということです。この福音においてこそ、人間は真の幸せにあずかることができる。

●悔い改めるとは、生き方を 180 度転換すること

そして、真の幸福にあずかるために私たちに求められていること、それが「悔い改め」です。悔い改めには、「メタノイア」というギリシャ語が使われます。悔い改めとは、単なる生き方の是正ではありません。自分の全存在を賭けて、根本的に自分の向きを変えるということです。ある意味では、「回れ右」です。当初進んでいた自分のベクトルを、180 度転換することです。英語では「コンバージョン」という言葉が使われます。同じく、徹底的に方向を変え、自分の進む道を変えるということです。これこそが悔い改めであり、回心という言葉にもつながります。

さらに、神の国について参考になるかもしれない言葉が、ルカの福音書 17 章にあります。

「ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。『神の国は、見える形では来ない。「ここにある」「あそこにある」と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ』」。

神の国は、「ここにある」とか「あそこにある」といって指し示すことができるものではない。むしろあなたがたの間にある、という表現です。人々の間に、神の国は立ち上がるという理解でいいだろうと思います。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

先ほどのマルコの言葉に、もう一度戻ってみましょう。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」とあります。丁寧に読むと分かるように、「もしあなたがたが悔い改めるならば、神の国は来る」とは書かれていません。人間が悔い改めようが悔い改めまいが、イエスの誕生において端的に神の国は来たという理解です。神の国の到来は、人間の回心に依存しないということ。これは、マルコに書かれていることの大切な点です。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

キリスト教とは何か（3）キリスト教の愛とはどんなものか

～要旨～

キリスト教で言われる愛とは、どんなものか。よく「キリスト教は愛の宗教である」と言われるが、愛という言葉だけならば、非常に抽象的だ。しかし私たちにとって愛とは、いくつもの具体的な形で表されるもので、その表れ方に愛の深さや広がりが示される。

具体的な行為によって示される愛について参考になるのは、「最後の晩餐」に関する聖書の記述（ヨハネの福音書 13 章）だ。イエスが無実の罪で殺される直前、弟子たちを集めて「最後の晩餐」を開く。彼らが普段食べているパンとぶどう酒が供されたその場所で、イエスは弟子たちの足を洗う。当時、足を洗うという行為は奴隷の仕事、その中でも最も下位の行為だった。

ヨハネ以外の福音書は、最後の晩餐を描く時に「聖変化」について触れる。しかしこのヨハネの福音書は、イエスの遺言とも言える「足を洗う」行為を記述している。

その意味は「人に仕える者になりなさい」ということだ。止めようとする弟子たちを諭してまで彼らの足を洗ったイエスは、その身をもって「人に仕える」ことの意味を伝えようとした。

たとえ最下位の行為でも、「足を洗う」ように人に仕える。それは言い換えれば、「互いに愛し合いなさい」ということだ。愛は行為であり、言葉だけでは意味をなさない。相手に対する具体的な行為を通じて、愛はなされる。

それは「真心」とも呼べるようなものだ。目の前の人に、どのように真心を込めるのか。そのあり方は、人によって相手によってさまざまだろう。しかし、具体的な営みを通じてこそ、相手に真心を尽くすことができるし、そこに愛も生まれる。まさに愛は行為なのだ。

～講義録～

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

●愛は具体的な形となって意味を持つ

　それでは、キリスト教の愛とは一体何を意味するかについて、簡単に説明したいと思います。自分自身の経験でもありますが、中学生か高校生の時、何かの教科書を見ていたら「キリスト教は愛の宗教である」という１行がありました。その言葉自体、私は間違ってはいないと思いますが、愛という言葉は、ある意味ではとても抽象的な言葉です。

　私たちが現実に送る素朴な生活では、愛には具体的な、様々な形があるだろうと思います。愛が、見える形で生活の中で立ち表れるときには、いろいろな表れ方があっていいだろうと思います。その形は一つしかないというわけではなく、むしろいろいろな表れ方があることが、愛の深さや広がりを示すだろうと思います。

　その愛について、また聖書を参考にしながら一緒に考えてみたいと思います。たった今述べたように、愛は必ず具体的な形あるいは行為によって表されるものだと思います。その典型的な一つを、イエスが「最後の晩餐」の際に、その場にいた弟子たちの足を洗った行為に見ることができます。その箇所は、ヨハネの福音書 13 章です。

　「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところ

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

で、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。わたしは、あなたがた皆について、こう言っているのではない。わたしは、どのような人々を選び出したか分かっている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない。事の起こる前に、今、言っておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということを、あなたがたが信じるようになるためである。はっきり言っておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

●なぜイエスは、弟子の足を洗ったのか

この足を洗う行為にどういう意味があるか。当時の社会で「足を洗う」のは奴隷の仕事でした。しかも、奴隷の中でも最も低い地位にある奴隷の仕事でした。最後の晩餐の時は、イエスがもう間もなく捕まって殺される、そういう夜ですが、その時に「最後にあなた方ともう一度食事がしたい」と言うのですね。そしてその際、彼らが普段食べている素朴な食料である、パンとぶどう酒を用意しました。

そしてイエスが語ります。「わたしは去っていけれども、心配しなくてもいい。この日常生活の食事の中に、私は現存する。いつまでもあなた方と共にいる」。こういうことを示し、「これを私の記念として行いなさい」といって、パンとぶどう酒を特別なものに変えます。後に、「聖変化」という言葉が使われます。これが、有名な絵にもある「最後の晩餐」です。これは、共観福音書、すなわちマタイ、マルコ、ルカの三つの福音書にも、基本的には同じように書かれています。もう一つは、パウロが書いた一番古い「コリント人への第一の手紙」に書かれています。

しかしヨハネの福音書には、そういう記述がありません。その代わりヨハネは、この最後の晩餐の場面で、イエスが最後の遺言のような形で足を洗ってみせたことを書いています。つまり、「人に仕える者となりなさい」ということが、彼イエスの遺言だったということです。「私は仕えられるためではなく、仕えるために来た」という言葉が別のところにありますが、そのことを身をもって示すために、イエスは弟子の足を洗ったというわけです。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

弟子のリーダーであるペトロが「先生、逆です」と言います。私こそがあなたの足を洗わなければいけないのにとストップをかけようとしたら、反対にイエスが、ストップをかけるなと言います。今は、私のするままにさせてほしい。そして「私が今やっていることの意味は分からないかもしれないが、後で分かるようになる」ということを告げます。

●愛とは、相手に真心を尽くすこと

弟子の足を洗った後、しばらく飛んだ後に、聖書ではこんな話が続きます。

「さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言っておく。あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」。

ここで書かれているように、新しい掟を与える。それは何かと言うと、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」ということです。今読んだのはヨハネの福音書 13 章 34 節ですが、この言葉は 15 章でももう一度語られます。つまり、イエスが弟子たちに残した言葉は、「互いに愛し合うということ」、この 1 点に尽きるわけです。

では具体的にどうするのか。愛という言葉を調べれば、確かに辞書的な意味で、抽象的に理解できるのかもしれませんが、問われているのはそこではありません。愛は行為ですから、具体的に自分の目の前の人とどういう風に関わるかというところまで行かなければ、愛は愛としての意味を成さないと思います。

愛は、必ず具体的な行為によって表れる。それは同じような言葉で考えると、「真心」と言ってもいいと思います。真心とは一体何なのかと問われたら、私たちは何がしかを語ることができるかもしれません。しかし問われているのは、その真心の込め方だろうと思います。具体的に、目の前の人に、どのように真心を込めるか。誰かのために心を込めて

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

料理を作ることも然り。あるいは宮沢賢治の言葉で言うならば、「東に病気の人あれば、行って看病してやり、南に死にそうな人がいれば、行って怖がらなくてもいいと言い」といった、具体的な行為も然りです。そういうことが真心を尽くすということ、込めるということであり、愛というものの実質だろうと思います。愛は言葉によって終わるものではなく、むしろ言葉を突き動かすものです。愛は行為であるということを確認したいと思います。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

竹内修一

キリスト教とは何か（4）「隣人愛」とはどういうことか

～要旨～

聖書でよく言及されるパウロとはどんな人物か。元来彼は、キリスト教を迫害するリーダーだった。ところが、迫害していたイエスが復活した後、その彼にパウロは出会ってしまい、パウロは回心する。これは、パウロにとって消すことのできない、根源的な出来事だった。

そのパウロは、繰り返し愛の重要性を説いている。「愛の讃歌」とも呼ばれる「コリント人への第一の手紙」13 章では、山を動かすほど巨大な信仰があったとしても、そこに愛がなければ無に等しいとまで言い切る。その手紙の中で、パウロは「愛は忍耐強い」と述べている。

愛は決してロマンチックなだけのものではない。愛を行為として表すならば、それは簡単なことではなく、喜びの他に苦しみや痛みが伴う。だから「愛は忍耐だ」と言われる。ヨハネの福音書でも、愛は命がけであると説かれる。

感覚的には捉えられない神をどのように愛するのか。イエスがその生涯を通じて示したのは、「隣人を愛する」ことが「神を愛する」ことにつながる、ということだ。自分にとって好ましいか否かを問わず、相対する隣人を愛することができるかどうか。そこに愛の実践があることを、イエスは示した。

マタイの福音書 22 章には、当時のエリート集団であるファリサイ人の律法学者が、イエスに議論を吹っかける場面が出てくる。律法学者はイエスに「どの律法が最も大事か」と問う。それに対してイエスは、最初旧約聖書を引いて「心を尽くすこと」と言う。しかしそこに彼は「隣人を自分にように愛する」ことが重要だと加える。つまり、「全身全霊で心を尽くし神を愛すること」と「隣人を自分と同じように愛すること」という二つの愛は、この地上において本質的には一つのものだということだ。神への愛と隣人愛は、分けることができない。これこそが、イエスが示した愛の本質だ。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

～講義録～

●パウロが語る、キリスト教の愛

次に、先ほどから出てきているパウロという人物ついて触れたいと思います。彼は最初、キリスト教徒を迫害するリーダーでした。しかし彼は、ある時に劇的な体験をします。これを「パウロの回心」と言います。今は詳しく語りませんが、どういうことだったかと言うと、迫害していたイエス・キリストが復活した後、そのキリストと出会ってしまうというものです。このパウロの不思議な体験について、「使徒言行録」という書物の中には3回書かれています。

これは彼が勝手に作った話なのではなく、消すことのできない根源的な体験であったということであり、この体験を通じて彼の回心が生まれます。「コンバージョン」が生まれるわけです。そのパウロがいろいろなところで愛について語ります。彼は繰り返し、信仰、希望、愛の重要性を説きます。そう説きながら、「愛こそがその中で最も大切なものであり、律法の完成である」、あるいは「あらゆる徳は、この愛のさまざまな具体的なかたちとして理解される」と語ります。

有名な「コリント人への第一の手紙」13章は、よく「愛の讃歌」と言われますが、そこでは次のように記されています。

「たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。……愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない」。

たとえ山を動かすほどの大きな信仰があったとしても、もしそこに愛がなければ無に等しいと言い切ります。どんなに深い、あるいは強い信仰があったとしても、それが愛から出てこないならば、意味がない。こういうことを彼は大胆に語りました。

●愛とは、忍耐である

私が読み上げたところで、パウロは愛のリスト、愛の定義を語ります。「コリント人への第一の手紙」が面白いなと思うのは、彼が「愛とは何々である」と最初に語るとき、

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

「愛は忍耐強い」という言葉を使っていることです。英語に翻訳すると、love is patient となります。「愛は忍耐だ」ということは、私たちが普段の生活の中で耳にしたり目にしたりする、ロマンチックなものだけではないことを示します。愛がロマンチックなものであることは否定しないのですが、愛はそれをはるかに凌駕しているものである。だから、愛を自らの身をもって行為として本当に表すとするなら、それは簡単ではないだろうと思います。それには多くの場合、痛みや苦しみといったものが伴うだろうと思います。

ヨハネの福音書には、こういう言葉がありました。「友のために命を捨てる、それ以上に大きな愛はない」。愛では命がけであることが問われているということです。それは全く不可能なことかと言われると、そうでもないだろうと思います。難しい、けれども不可能ではないということです。親が子どものことを思うときに、親はどうするかを考えれば、愛は命がけのものであることを、歴史の中で探すことができると思います。

旧約聖書でも、「神を愛する」ことと「隣人を愛する」ことの大切さが説かれていました。神を愛するということと、隣人を愛するということ。これら二つの愛は、その本質において一つであることを、イエスは自らの生涯を通して示しました。人間は、感覚的な目で見ることのできない神をどのように愛したらいいのか。イエスは、自分の目の前の隣人を愛することに尽きると語ります。「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができないのである」。これは、「ヨハネの第一の手紙」に書かれている言葉です。神は見えません。そこで救われるにはどうしたらいいかを考えたとき、あなたが問われているのは、生活の中で相対している人とどう関わるかということです。自分にとって好ましい人であるとか好ましくないといったことは問わない。むしろ自分にとって、自分が苦手とする人との関係の中に問われていることである。このように考えてもいいだろうと思います。

●「最も重要な掟は何か」

その隣人愛と神への愛について、新約聖書の有名な部分を紹介します。

「ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。』イエスは言われた。『「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさ

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

い。」』

これは、マタイの福音書 22 章の 34 節から 40 節にある言葉です。ここに「ファリサイ派の人々」が出てきます。聖書を読んでいるとよく出てくる人々です。多くの場合、このファリサイ派の人々は、イエスと対立関係にあった人々です。彼らは、いわゆるエリートグループに属していました。その中に、律法学者という人々がいました。この律法には、法律よりももう少し広い意味があります。そして律法学者は専門家の集団です。彼らは、ユダヤの人々にとってとても大切な律法の研究をし、その律法がある生活で生きることを実行した人々でした。それ自体は悪いことではないのですが、人間はともすると、自分ができることができない人を、ジャッジメントし始めます。「なぜあなた方は、きちんと律法を守れないのか」。この点で、イエスとの間に対立関係が生まれます。

当時はサドカイ派という人々も出てきます。ファリサイ派の人々とサドカイ派の人々は、元は仲良くありませんでしたが、ただ 1 点において手を結びました。それは、イエスを亡き者にしようということです。イエスを懲らしめる、その点において手を結び、サドカイ派は現れてきます。

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々をやり込めたと聞いて、一緒に集まりました。一人の律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねます。律法の専門家が、素人であるイエスに鎌をかけるわけですね。今で言えば、法律の専門家が私に法律の難しい難題を吹っかけてくるようなものです。

●神を愛することと隣人を愛することは、イコールである

その律法学者は、「先生、律法の中では、どの掟が最も重要ですか」とイエスに尋ねます。当時の律法には、613 の決まりがあったそうです。ですからこの問いかけには、全く意味がないとも言えません。613 もあれば、どれが一番重要だろうかという優先順位、プライオリティーが気になるのも不思議ではないからです。だからこの律法の専門家による問いかけも、あり得るものかとは思います。

するとイエスは、こう答えます。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である」。イエスが語った「心を尽くし」という言葉は、旧約聖書の中の申命記から持ってきたものです。律法の専門家が「何が一番重要なのか」と聞いているので、イエスはここでストップしていても悪くなかったと思います。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

ところがイエスは続けて、「第二もこれと同じように重要である」と言って、聞かれてもいない２番目を語りました。イエスは「隣人を自分のように愛しなさい」と語ります。この「隣人を自分のように愛しなさい」も、やはり旧約聖書のレビ記という書物からの引用です。

律法学者による「律法の中で何が一番重要か」という問いかけに対して、イエスはまず「心を尽くして全身全霊をもって神を愛しなさい」と言って、神への愛について語ります。そして第二はこれだと言って、レビ記の言葉である「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉を出します。つまりこの二つの愛は、イエスにおいて本質的には一つのものだということです。この地上において、これら二つの愛は分けることができないものです。

目で見ることができない神を「愛する」といっても、それは具体的には、目の前にいる自分が関わっている人とどういう関係を持つかということですね。その具体的な人を受け入れることができないならば、それは神を愛していることにならない。先ほどのヨハネの言葉で言うならば、「目に見える兄弟を愛さないのに、なぜ目に見えない神を愛することができるのか」というところに落ち着きます。だから、この二つの愛は一つのものである。これらは、分けることができないということが、イエスを通して語られたと聖書は書いています。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

竹内修一

キリスト教とは何か（5）「赦す」とはどういうことか

～要旨～

キリスト教の愛は、聖書の様々な部分で語られている。例えば「コロサイ人への手紙」では、人間は神に愛されているからこそ、慈愛や寛容の心を持つことができるとされる。原点が愛であり、そうだからこそ仮に相手が間違っているとしても、相手を赦しなさいと聖書は伝える。

ここで示されているように、愛とは「赦し」でもある。しかしこの「赦し」は、水に流すとは異なるものであることに注意が必要だ。どんな行為であれ、わたしたちは自分の行いを消すことはできない。間違ったことをしたならば、やはり謝罪や反省は必要だろう。

またここで語られる愛では、「平和」という言葉も出てくる。キリスト教が語る「平和」は、例えばヨハネの福音書に出てくる。そのエピソードは象徴的だ。

師であるイエスが死刑になり、その弟子たちは自分たちも同じ目に遭うのではないかと恐怖に震えた。彼らは、家のドアだけでなく、自分たち自身の心も固く閉ざし、そこに「鍵を掛けた」。自分の心を閉じるのは、外界との関係を断つことだ。それは言わば「死」と同じである。自殺をする人たちも、弟子たちのように追い詰められ、心を閉ざしてしまう。

聖書は、心に「鍵を掛けた」弟子たちの前に、イエスは現われ「平和があるように」と言ったと伝える。この「平和」という言葉の背景にあるのは、当時のユダヤ人が挨拶で用いるヘブライ語であり、その意味は「神が共にいる」だ。つまり「平和」であることは「神が共にいる」ことだ。

かつてマザー・テレサは、「真の平和は沈黙から始まる」と言った。この沈黙とは、心穏やかにして、神からのメッセージにきちんと耳を傾けることを言う。カトリックの伝統でも、大勢の人が集まっても秩序が存在することから平和は始まると言われる。平和とは、単に戦争がない状態なのではない。一人一人のいのちが大切にされることを指すのである。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

～講義録～

●愛とは他人を「赦す」ことだ

キリスト教の語る愛については、他のところにもいろいろありますので、もう1点だけ紹介します。「コロサイ人への手紙」というものがあります。「コロサイ人への手紙」3章12節からの引用です。

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたのうちに豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい」。

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい」。まず愛されているから、このようなことを身に着けることができると語ります。つまり、愛が原点になっているということですね。そして、「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい」。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、と言いますから、なければ当たり前です。仮にそういうことがあったとしても、例えば相手が間違っていて自分が正しかったとしても、相手を赦しなさい。こういう言葉が、ここでスッと書かれます。

少なくとも、このコロサイの箇所では、愛の意味内容は「赦す」という言葉に置き換えられていると思います。ただ注意しなければいけないのは、聖書における「赦し」という言葉は、「水に流す」とは全く違うということです。たとえ良いことであっても悪いことであっても、私たちが何か具体的な行為をした場合、その行為を消すことはできません。もし間違ったことをしたとするならば、そのときにはやはり謝罪や反省が必要だろうと思います。そして、自分がきちんと反省して、過ちを認めてそれを告げたその後で、相手が

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

赦してくれるとするならば、私たちがするべきことはその償いだろうと思います。ですから「赦し」と言っても、決して水に流していいことではないと思います。人を傷つけた時に、それを水に流すのは、やはり良くないことでしょう。

●キリストの愛は「平和」につながる

聖書は、「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。なぜならば愛は、すべてを完成させるきずなだ」と語ります。「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです」。ここでの愛という言葉は、「赦し」という言葉に置き換えられ、そして「愛を身に着けなさい。愛はすべてを完成させるきずな」だとして、また愛が語られます。

例えば私たちは、普段いろいろな服を着ます。それと同じように、「愛を身に着ける」という表現がなされています。そして、愛を身に着けた人は一体どういう人になるのだろうかということについて、静かに思いをはせていいと思います。愛を身に着けている、愛を生きようとしている人は、具体的にどのように生活をしているのだろうかということです。

同時に、ここで「平和」という言葉が出てきます。キリスト教の語る愛という言葉は、平和という言葉にもつながっていることも、押さえておきましょう。そこで、平和について紹介しましょう。ヨハネの福音書20章19節からの引用です。ここは、イエスが復活した後、弟子たちの前に現れる場面です。そこは、次のように語られています。

「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る』」。

●「平和」とは、神と共にあること

イエスが殺された後のことですから、弟子たちは「次は自分たちが殺されるのではない

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

か」と思い、集まってぶるぶる震えていたと思います。戸には鍵が締められていた。自分たちのいる家の戸に鍵を掛けていたと書かれています。ドアは一つしかないのですが、実は「鍵を掛けていた」という部分を原文（ギリシャ語）で見ると、複数形になっています。どうして複数形なのかと考えてみるに、もしかしたらこのように解釈できるかもしれないと思いました。文字通り、鍵は戸に掛けられていたのですが、同時にその家の中でぶるぶる震えていた彼ら一人一人の心にも、鍵が掛けられていたということです。

「自分の心を閉じる」とはどういうことかと言えば、それは「外の世界との関係を絶つ」ということです。外の関係を絶つとはどういうことかと言うと、それは窒息状態であり、死を意味するだろうと思います。

この日本において、1年間で約3万の人が自らの命を絶つということは、どういうことか。おそらくその多くの人には家族がいただろうと思います。しかし、自分にとって一番近い存在である家族にさえも、自らの苦しみを語ることができないくらい追い詰められていたということだろうと思います。心に鍵を掛けるとは、そういう孤独の状態です。他の人との関係を絶つというこの孤独が、どれほど人間にとって大変なことであるか。

その「戸には鍵が掛けられていた」というところに、イエスがやってきて真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と語ります。ここで2回語られるのが、「あなたがたに平和があるように」という言葉です。平和という言葉は、「エレネー」というギリシャ語だったと思いますが、その背景にあるのは「シャローム」というヘブライ語のようです。このシャロームという言葉は、普段ユダヤの人々が日常会話であいさつに使うものだそうです。「おはよう」など、日常の言葉として使うこのシャロームという言葉の本来の意味は、「神が共にいる」という意味です。真の平和は、神が共にいるというところから始まる。こういう理解が、そこにあります。

●「平和」とは、穏やかに神のメッセージを聴くこと

実は、旧約聖書のイザヤ書という預言書の9章5節には、こういう言葉が書かれています。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威は彼の肩にある。その名は『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』ととなえられる」。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

「みどりご」というのは赤ちゃんのことで、後にイエス・キリストに重なってくるみどりごのことだろうと思います。これはクリスマスによく朗読される箇所です。そのみどりご、男の子の名前は何かというと、「平和の君」と語られます。この君（きみ）は君（くん）という字を当てますが、英語ではプリンス・オブ・ピースとなります。

イエスはどういう方であるか。平和の君である。その方が、恐れてぶるぶる震えていた弟子たちに対して語った言葉が、「あなたがたに平和があるように」という言葉でした。その平和の根拠には何があるか。それは、「神が共にいる」ということでした。私たちにとって真の平和とは何かと言ったら、それは神が共にいるところから始まる。これは旧約聖書に始まり、さらにイエスを通して語られた言葉にも受け継がれています。

かのマザー・テレサは、生きている時に小さなメモを持っていたそうです。そのメモには、次に紹介する言葉が書かれていて、会う人にそのメモを渡していたそうです。「沈黙の実りは祈り、祈りの実りは信仰、信仰の実りは愛、愛の実りは奉仕、そして奉仕の実りは平和」というものです。「真の平和はどこから始まるのか。それは沈黙から始まる」という理解です。

この沈黙は、「何もしゃべらない」ということではありません。心穏やかにして、自分が神からどういう言葉をかけられているか、神からのメッセージは何かということを、心を開いて聞く。これがここでいう沈黙であり、そこから真の平和は始まると言います。自分の心の中が穏やかでないとき、人は他の人との関係を平和のうちに保つことは難しいだろうと思います。まずは自分の心の中に、平和を築くこと。それができる時に、自分の目の前の人や家族、地域社会、国、世界、そしてもっと言ってよければ宇宙そのものと平和にな関係を築けるようになるだろうと思います。

●「平和」とは、各人の命が尊ばれること

カトリックの伝統の中では、平和とは何かという場合、「秩序の静けさ」という言葉を使います。ラテン語だと「トランクウィリタス・オルディーニス」といい、英語だと「トランクリティー・オブ・オーダー」です。「秩序があるところには必ずその静けさがある」、心の中がざわざわしていない状態です。それが心の穏やかさであり秩序であって、これが平和である。たとえ大勢の人が集まったとしても、もし秩序というものがあるならば、そこには穏やかさ、平和があるということです。平和とは、このように考えればいいと思います。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.

「平和とは何か」という問いかけをすると、おそらく多くの人は「戦争がない状態」と答えるかもしれません。私自身、それは間違っていないと思います。A という国と B という国が核を持っていて、しかも緊張関係にある。そのとき、緊張関係にあるだけで核は飛ばしていませんが、それを真の平和と言えるかというと、そうではないだろうと思います。真の平和にはもっと積極的な意味があります。一番深い意味では、私たちに与えられるものかもしれませんが、私たちが日々の生活の中で丁寧に築いていかなければいけないものだろうと思います。

私の中では、平和とは何かと問われたときは、次のように考えています。「平和とは、一人一人のいのちが、その人のいのちとして大切にされる、あるいは尊敬される」。一人一人のいのちが、その人のいのちとして大切にされるとき、真の平和が来るだろうと思います。先ほど例に挙げたように、3 万人近い人が自殺をし、交通事故による死者は四千数百人、中絶数は 23 万件あるのが、今の日本の社会の現実です。それを見て、この日本は本当に平和なのか。確かに現在、戦争には行っていないし始まってもいませんが、どうも平和ではないような気がします。とても不安を感じますね。

とりわけ今の世の中の流れを見ていると、そう思います。私には戦争体験がありませんが、かつて第二次世界大戦を体験された方と話している時に、こういう話を聞きました。今の日本は、昭和 14～16 年と雰囲気が似ている。その人は、気付いた時には戦争が始まっていたと言われたのですね。今、私たちの国は平和だと思うかもしれないが、そこは少し丁寧に見ないといけないのではないかと思います。先ほどから聖書で確認しているように、平和も、愛や赦しといった言葉とつながってくるものとして、考えていいものだろうと思います。

無断引用、転載、配布禁止
©Imagineer Co., Ltd. All rights reserved.